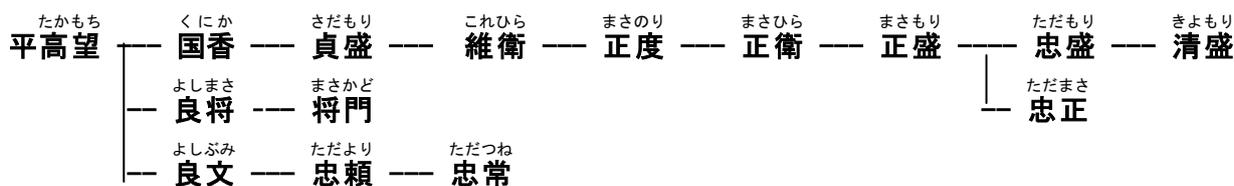


第6話 平氏の出世

将門や忠常のような謀反人を出したために平氏は一時勢いを失ったが、院政時代になって再び振り始める。源氏の勢力が東国に盛んであったのに対して、平氏の勢力は主として西国で伸びる。

義家の子の義親が誅される

源義家が清原氏の乱を平らげて京都に帰って後は、日本一の武将として評判が高く、その威名は広く天下に轟いていた。それで朝廷では、僧兵が暴行を働いたときなどには、いつも彼に命じてこれを鎮めさせた。そのため、源氏の勢いは京都に於いてもまた大いに盛んになったが、其の後、義家の子の義親が対馬守として任国に在った時に、朝廷の命を奉じなかったことがあって、隠岐に流されました。義親は更にまたその処罰の不当なのを憤って、密かに隠岐を脱出して出雲に入り、国司を追い出して暴威を振るったので、朝廷では因幡守平正盛に命じてこれを討たせた。それでこの時、義親が朝敵となって誅され、源氏の勢いが大いに衰え、これに代わって彼を討った平氏の勢いが次第に盛んとなりました。



伊勢平氏

平正盛は貞盛の五世の孫です。先に同族の忠常が東国に據って乱を起こして、源頼信に討たれた時に、他の同族の多くは、相率いて源氏の家臣となって安全を計ったが、貞盛の子孫の一家だけは、さすがに平氏の嫡流ですから、これを屑しとせず、東国を去って伊勢に移り、その地方を根拠として勢力を養っていた。

伊勢平氏というのがこれで、正盛に至っては北面の武士となり、白河法皇に近づいてそのご信任を受けたのでした。彼は義親を征伐した後、諸国の国司に任ぜられて、ますますその富を蓄えた上に、僧兵の跋扈を鎮め、海賊や強盗を捕らえたりして功を立てたために、官位も次第に昇進したが、その子の忠盛の時代となって、平氏は更に長足の出世をしました。

忠盛もまた父の正盛と同じく白河法皇の厚い信任を受けた。それに就いては次のような話なども伝えられている。

祇園の妖怪

彼が若い時分の事ですが、或る夜、法皇がお忍びで京都の町へお出ましになった時に、彼は北面の武士としていつものようにお供をしていた。空が真っ暗に曇って、時々雨が烈しく降りかかったりする

第6話 平氏の出世

うすきみ わる 薄気味の悪い夜でした。 みくるま ぎおん やしろ 法皇の御車が祇園の 社 の近くにさしかかった時に、ふと前の方に不思議な光り 物が見えた。 時々ぱっと光っては消え、消えてはまた光る。 その光った時に姿を見ると、頭は銀の針 磨き立てたようにきらきらときらめき、右の手には槌のような物を持ち、左の手には光る物を持っている。



京都 祇園の社 (八坂神社)

これこそ鬼に違いない。 手に持っている物 は打出の小槌であろう。 恐ろしいものに出会 ったものだと、お供の者は御車を大路に止めて、 大きに 驚き騒いでいる。

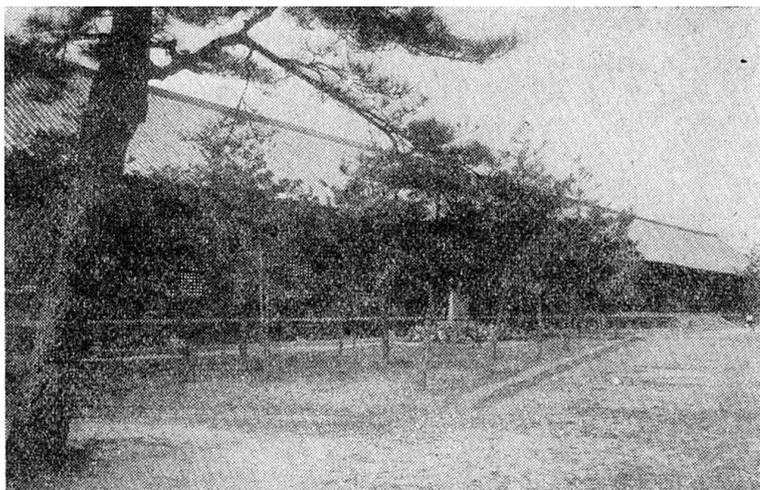
その時、法皇は忠盛を召して、「あのものを 射止めよ」とお命じになった。 忠盛は仰せを 承 ってそのほうへ歩み向ったが、たとえば

妖怪にしたところで、そう強そうなものではないのを見ると、狐か狸の仕業であろうと思ったので、 射て殺してしまうよりは生け捕りにしてくれようと、ぱっと光っては消え、光っては消えるのを目当てに 近づいて行って、いきなりがっしり組みつくと、「これはどうなされる？」と相手は驚いていった。

鬼でも妖怪でもなく人だったのです。 こちらに待ち兼ねていたお供の者らが、手に手に松明をとも して行ってみると、六十才ばかりの老僧が、御堂に灯明を上げるために、片手には油の入れ物を持ち、 片手には土器に火種を入れて持っているのです。 雨が烈しく降るので、濡れないようにと、麦の稈を引 き結んで被っていたのが、時々、消えそうになると吹きおこし吹きおこした土器の火に輝いて、銀の 針のように見えたのです。 それが分ると、今の先の恐ろしさはみんな忘れて、誰も彼も腹をかかえ て笑った。 法皇は忠盛の勇氣とその 考え深いのを深くご感心されて、大いにお褒めになったといふこ とです。

忠盛、昇殿を聴される

その後、忠盛は次第に官位も昇進して、諸 国の国司などにも任ぜられ、山陽、南海の海 賊を捕らえたりして功を立てた。 白河法皇 がお崩れになった後は、つづいて院政をされ た鳥羽上皇の信任を受け、いよいよ忠勤を 励んだ。 更に上皇の御願寺である得



京都 三十三間堂 (得長寿院)

の監督を命ぜられて、立派にその役目を勤め上げると、その功によって但馬守となり、間もなく刑部卿 に進んで昇殿を聴された。

昇殿というのは、天皇の常の御殿である清涼殿の殿上に昇ることで、これを聴された人を殿上人 とも雲の上人ともいって、特別に尊ばれたのです。 これまで武士は檢非違使になるか、鎮守府や兵衛

第6話 平氏の出世

府の武官になるかする外には、地方の国司に任ぜられるのが常で、8 省の卿となって昇殿を聴されるといふようなことは未だ嘗てなかったのです。忠盛は実に武士で昇殿を聴された始めでありますから、彼に取っては破格の出世で、非常な名誉だったのですが、それだけにまた以前からの殿上人はこれを嫉み憤りました。

闇討の噂

彼らは何としてもこの田舎武士に恥をかかせようと考えて、ついに豊明節会の夜に、殿上で忠盛を闇討ちにしようと図った。忠盛はこの噂を聞くと、「自分は文官の身ではない。武勇の家に生まれて、今、そういう恥を受けては、家の為、身の為に残念だ。といて、この事を聞きながら出ないのも卑怯である。要するに、身を全うして君に仕えるのが忠臣の法である」と、内々でその用意をして参内した。一体、この殿上へは、刀などを持って行くことは出来ない筈になっていたのに、その夜の忠盛は、短刀の大きいのを腰に差して、澄ました顔をして人々の中にまじったのみならず、わざと人目につくように、時々腰の辺をくつろげてその短刀の柄を出したり、火の薄暗いほうに向って、この短刀を抜いて鬢にぱりぱりと当てたりした。余所からは氷のように冷たく光って見えたから、人々は目を澄ましていた。

それに、忠盛の家来の平家貞という者が、狩衣の下に萌黄の腹巻 - 胴だけの鎧 - を着、太刀を脇ばさんで、御殿の前の小庭に畏まっている。そこには身分のない者の入って来るところではないのだから、役人が見咎めて、追い立てようとする、家貞は畏まって、「主人の忠盛が、今夜、闇討ちにされる由を奉って、その様子を見るためにこうしているのであります。出ては行きません」といって、又畏まっている。とても動きそうな様子もありません。

伊勢瓶子は素瓶

それやこれやで、その夜の闇討ちはお止めになったが、そのうちに、忠盛が舞を舞う時になると、公卿らはいつも定って囃すことになっている拍子を変えて、「伊勢瓶子は素瓶なりけり」といって囃した。忠盛の目が眇(訳注：やぶにらみ)であるのを嘲ったのです。伊勢瓶子は伊勢平氏で、伊勢から出る瓶子 - 徳利 - は素焼きで、即ち素瓶であるから、それに眇を通わせたのです。忠盛もこのあてこずりはどうしようもなかったから、聞かない風をして忍んでいた。

やがて、忠盛が御殿を下がるに当って、紫宸殿のうしろで、主殿司という役人に、それまで差していた腰の短刀を渡して、後に必ずおたづねがあらうから、確かに預かっておいてくれるように、といって家に帰りました。

さて、節会の終わった後で、大勢の殿上人らは揃って上皇に訴え出た。「たとえ忠盛が代々の武士であると申せ、既に殿上人となって御殿に参る上は、その作法に依るべきであります。然るに、忠盛は、殿上の小庭に家来を召し連れ、或いは腰刀を差して節会の座に列なるというような、未だ嘗て例のない無法な事をいたしました。実に怪しからんことでもあります。早くお罰しになって、彼の役をやめさせるようにして頂きとうございます」と。

第6話 平氏の出世

ぎんぱく ぼくとう 銀箔の木刀

上皇は大いに驚かれて、直ちに忠盛を御前に召してその事実をお尋ねになった。すると、忠盛は、「先づ、家来が小庭に参った由は、全く存じ知らないことでありますが、近ごろ、私の身に就いて、何事か企てられているという噂がありましたから、その事を家来が聞いて、私の恥辱を救うために、わたしには知らせずに密かに参ったものかとぞんじます。若し罪がありますならば、その者を呼び出しましょう。次に刀の事は、主殿司に預けておきましたから、それをお取り寄せになって、刀であるかどうか、ご覧くださいませ」と謹んで答え申し上げた。

尤もの事であると、急いで彼の刀を取り寄せてご覧になると、上は黒塗りの短刀だが、中は木刀に銀箔を押したものでした。その場の恥を遁れんために、刀を差した様に見せたけれども、中を木刀にした用意の程は眞に感心であると、上皇には却って忠盛の才智を褒め、「家来が小庭に参ったというのも武士の郎等の習いであろう。忠盛が存じ知らないことであれば彼の罪ではない」と、これもお咎めにならなかった。

しゅっせ すいうん 平家の出世と源氏の衰運

こういう風に、忠盛は白河法皇及び鳥羽上皇の厚い信任を受けたために、当時の武士としては前例のない出世をして、平氏が後に大いに栄える道を開いたが、そのころの源氏は平氏に比べて余程劣っていた。義親の子の為義が家を嗣いでいたが、彼は忠盛と同じ年配でありながら、位は従五位下に止まり、官は檢非違使たるに過ぎなかった。忠盛が正四位上に叙せられ、刑部卿に進んで昇殿を聴かれたのと比べて何という相違であろう。

源氏の衰え始めたのは、勿論一つは先に義親が朝敵になって誅せられた上に、一族の間に家督の争いが起こったりして、その勢力がいくつにも分かれたためですが、一つは忠盛が若い時分から宮廷の人々に近づく機会が多く、宮中の礼儀などをも弁えていた上に、交際が上手であったのに反して、為義は武骨一遍の武士で、武勇にこそ長じていたが、外には全く融通が利かなかつたので、宮廷では自然と重んじられなかったのでしょう。それに、平氏は正盛と忠盛がつぎつぎと諸国の国司になって多くの荘園を作り、又、私かに海外の諸国と交易した莫大の利益を得ていたのです。その富の点でも源氏にまさっていたのです。

さて忠盛は、こうして平氏が後に大いに栄える基礎を築いて置いて、第76代近衛天皇の御代に58歳で死んだ。その子の清盛が後を継いだが、間もなく起こった保元、平治の二度の乱に大きな功を立てて、驚くほどの出世をしました。

(第6話 平氏の出世 終わり。 次は前頁に戻り、 第7話 保元の乱)